

熊毛地区社会教育委員だより

令和3年2月発行
熊毛地区社会教育
委員連絡協議会

青少年育成の観点からの社会教育の在り方

熊毛地区社会教育委員連絡協議会
会長 鮫島 和巳

私の住んでいる南種子町の下中地区は、5集落に200人弱が居住し、高齢化率は40%と町内でも高く、児童数は宇宙留学生を含めて11人という存続の危機に直面している地区です。このような環境の中で、児童に卑屈さをもたせないように、教職員はもちろん、保護者、地区の有志が学校行事に積極的に参加しています。

特に、今年度の秋季運動会は新型コロナウイルスの感染予防を最優先にしつつも思い出がいっぱい詰まったイベントにすることができました。「ひょうたん踊り」は少ない練習時間にもかかわらず、初めての児童も元気よく飛び跳ねていました。

下中地区では、このような郷土芸能の伝承のほか、豊かな自然や歴史的風土を活かした教育活動が充実していると感じています。

第3土曜日を中心とした青少年育成活動でも年間を通して季節に合った活動を企画しますが、下中八幡神社御田植祭りでは、全児童が田んぼに入り、昔ながらの田植え体験ができました。ウミガメの産卵、孵化、放流は誰でも経験できることではありません。

歴史と風習、郷土芸能を織り込んだ「下中郷土カルタ」の暗唱や、イギリスの帆船ドラメルタン号漂着の遺産である「インギー鶏」の飼育が学校教育の中に定着しています。

しかし、少子高齢化は避けられない現実です。手をこまねいては地域が取り残されてしまいます。町が移住・定住促進のアナウンスをしていますが、町民の危機感はやや低いように感じます。

社会教育の重要性は、9年間の義務教育、また、それ以後の各種高等教育だけでは自分たちの知識・教養の涵養には足りないことを認識することで自ずと理解できるのではないのでしょうか。

「人間死ぬまで勉強だ」の「生涯学習」の気風を定着させていきたいですね。ちなみに、私は、現在、囲碁を勉強しています。



下中八幡神社御田植祭り

地域元気プランの策定に向けて

南種子町教育委員会社会教育課
社会教育係長兼社会教育主事 坂口 伸二

これからの地域活動を考える上で、本町における中心となるのが自治公民館組織である。

本町は8地区に分かれているが、そのほとんどで、人口減少、少子高齢化による様々な課題が見られる。

そこで、本町では平成29年度から地区ごとの元気プラン策定に向けた取組を始めた。

まず、参考となる先進地を調べ、研修会等を行い、8地区のうち2地区をモデル地区として決定した。

今回は、その1つである平山地区自治公民館を紹介し、地域活動の在り方について考えてみたい。

平山地区は、約200世帯（人口約370人）の小さな地区である。4集落から成り立っており、人口の減少から、郷土芸能や様々な行事の継続が困難になっている。

まず、今回のプラン作成を進める上で、私が一番大切にしているのは、地域の主体性である。プラン策定はあくまでもきっかけであって、地域に住む人たちが、地域のことを、そして、地域の将来について考えてもらいたいということを何度も説明した。

実行委員会を立ち上げ、住民アンケートを行いながら協議を進めたが、初めての取組に思うようには進展しなかった。現在、役員と内容を整理し、項目ごとの分科会など別の方法を模索しながら進めている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、地域行事の多くが中止となったが、新たに平山地区では壮年部（50歳以下）が組織され、若い世代が集まる機会が増えたことで、住民の意識も高まりつつある。

この流れをうまく軌道に乗せられるよう、これからも地域主導を念頭に、この取組を推進していきたい。



昭和40年代わがまちの移動図書館の追憶

西之表市立図書館
館長（非常勤） 鮫嶋 安豊

当時、私は西之表市立種子島博物館の学芸員だった。1階博物館、2階図書館で、職員は博物館一人（小生）、図書館一人（女子）、館長は両館の兼務という体制である。

館長は図書館長が主務で、地方の名士的存在で、専ら中国文学書や古文書の解説に明け暮れておられた。利用者は学生・児童生徒が主で、試験勉強にやって来る高校生、郷土史を調査に来る一般人など、今とそんなに変わらず、ゆっくりした速度だった。ただ、図書館を取り巻く社会環境は、ちょっと異なっていた。今日はIT化、図書があふれている時代である。

当時は、敗戦のどん底からはい上がり、図書や文化という文字にさえ渴望と憧憬の念を抱いていた時代である。それだけに公共図書館の役割は大きかった。そんな時に、本市の小さな図書館も、県下の図書館に遅れまいと大字に12か所のステーション（配本所）を設け、移動図書館を始めたのである。ステーションは主に小さな雑貨店だった。

館長自ら、公用車を運転し、普通車の箱バンの後部を開け、ミカン箱に図書を詰め込み、満載して、各ステーションを巡回していた。自ら重いミカン箱を箱バンに積み込む館長の後姿に、若き学芸員の血潮は湧いた。運転と力仕事を進んで手伝った。児童生徒は、学校帰りにステーションに立寄り、飴玉を買う合間に、目を輝かせて図書一冊を借り、大切に抱えて、スキップして帰宅してゆく。女性店主は笑顔で貸出帳の記入をし、子供らを見送る。あれから50年の歳月が経過した。今日の移動図書館車は、2000余冊満載、三方開きの専用車である。

私には何故か？豪華でまぶしく見える。

あの熱き日々、大字地域を箱バンで届けた「知的滋養剤」。きっと一滴の糧となったと心の隅で信じている。私の「目指す図書館像」の原形となった。



現在運行中！
移動図書館車「あおぞら2号」

母親として思うこと

— 市 P 連 母 親 委 員 会 の 取 組 —

西之表市 P T A 連絡協議会
副会長 春田 沙代子

私たち西之表市 P T A 連絡協議会の活動の1つに母親委員会という活動があります。私たちは子供を授かって親になりますが、子育てについての教科書があるわけではなく、どのように自分の子供を育てるかは、それぞれの親次第となります。

この母親委員会は、年3回ほど実施し、市内の各小中学校及び高校の P T A 母親代表が参加します。子育てに関する意見交換や家庭教育に関する講話やワークショップなどを行うことで、本市の子供たちが将来自立した大人へと成長するための知識や情報を勉強する機会になればと考えています。

最近よく耳にする特別支援教育や発達障害への理解を深めるため、子供の発育の途中で子育てに行き詰まる時期の過ごし方や、子育てのサポートやアドバイスをしてくれる団体などを紹介しました。また、母子保健に長年携わる保健師を交えて意見交換や情報交換をし、母親同士、悩みを共有し合いました。

私は、P T A 活動に参加することで、同じ悩みをもつ会員同士や先輩会員の言葉やアドバイスを得て、自分の子育ての参考にさせてもらいながら、悩んだり考えたりし、自分の子供を育てることがとても大切だと思っています。今後も、家族の健康を考えながら、毎日の献立を考えるように、子供たちの心を豊かに育てられる親になりたいと願い、素晴らしい子育てをしている先輩たちの背中を追いかけながら、一緒に子育てをしていきたいと思っています。



県 P T A 活動研究委嘱公開熊毛地区大会

屋久島町 P T A 連絡協議会
会長 緒方 健太

令和2年度鹿児島県 P T A 活動研究委嘱公開熊毛地区大会はコロナ禍の中、神山小 P T A 会員の尽力により、誌面開催・神山小ホームページでの公開となりました。

この公開に向けて神山小PTAは一昨年から計画・準備してきましたが、その代わりとなる研究誌「神山BOOK」に諸活動や会員の熱い想いが集約されました。

神山小PTAでは、子供に「生きる力」を育てたいという願いをもとに「神山Pチャート」を活用して、PTA活動の「意義」や「意味」を確認しながら、地域と連携を図りつつ、充実した取組がなされています。



【神山Pチャート】

単に活動をするのではなく、PTA活動の「意義」を会員が理解し共有することでポジティブな協力やスムーズな連携を生み出すことができます。(神山BOOK参照)

「おやじの会」は2019年に「親ん学校」と名前を変えて再始動。PTA組織には組み込まれず、あくまでも任意団体で、父母だけでなく祖父母、だれでも参加できて、規約も役職もない。門松づくりや校庭の遊具補修も、やりたい人や、やれる人が集まってやるので雰囲気も良く、推進力となる「親ん学校」のゆるくてソフトな雰囲気が神山小PTA全体を包み込んでいく。義務ではなく協調・前向きな姿勢が子供たちにも還元されていく。(研究冊子参照)

このような取組が満載の研究誌を皆様に見ていただければ、各单位PTAの活動や地域づくりにもきっと役立つことと思います。私たちのPTAでも回覧するなどして、会員の資質向上につなげていきたいと考えます。

公開ホームページアドレス QRコード→
<http://www5.synapse.ne.jp/kamiyama-es/>



い保護者も増えている。

そこで、PTA活動をしながら地域活動に参加し、子供が卒業してPTA活動が終わったら、自然に地域の活動に参画できるような体制づくりや、お世話になった地域のために貢献できるような持続可能な考え方を学ぶ場として生涯学習大会を位置付けた。

地域も単位PTAも、活動が硬直すると、つながりが薄れたり、協力体制も困難になったりする。赴任1年目の生涯学習大会では、現在の諸団体の活動状況を明らかにし、その意義を見い出して評価し、講師に今後の活動や在り方について方向性を指し示してもらった。

また、2年目の生涯学習大会は、町PTA委嘱公開を同時開催してPTA活動と地域活動の連携の在り方を重点的に取り上げた。大会では、子供たちのために、義務感ではなく前向きに取り組むことや、できる人ができることをできるときにやっていくことが、子供や地域のためになると価値付けられた。そして、たくさんの人が、1つの目的のために取り組むためには、協調性や緩やかな発展が大切だという考えを参加者は共有できた。

町民一人一人に、持続可能な組織運営の在り方や考えを更に広げていくためには、このような機会を他に設けたり、各单位PTA活動を充実・活性化したりする必要がある。

そして、各地域・PTAのリーダー育成を図ることが大切であり、機会を逸せず、目標をもとに共に学ぶ場を設定することが必要である。

3年目となる令和3年2月の生涯学習大会では、「ふるさとを興す熊毛地区女性の学習大会」を併せて開催する予定である。地域の諸活動に、もっと女性の視点を取り入れ、女性参画の在り方を学ぶ場とすることをねらって企画した。特に地域のリーダーと共に、この視点を学んで広げていきたいと考えている。

町民一人一人が生きがいをもち、心身ともに健康で潤いのある充実した人生を送ることができる、活力に満ちた協働社会の創造に寄与することを目指して。

PTA活動から地域活動へ

屋久島町教育委員会教育振興課
 統括係長兼社会教育主事 溝上 秀人

屋久島においても人口の減少により、地域活動に参画する人材が年々減少し、活動や運営が難しくなってくるのが課題である。また、PTA活動には熱心だが、地域活動には参加しな

文化事業の発展に向けて

中種子町文化協会
 会長 徳永 眞一

一昨年に発生した新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、行政関係そして地域においても各種の行事等が中止を余儀なくされ、極めて寂しい状況となりました。文化事業におきまして

も、熊毛地区広域文化祭が残念ながら中止となりました。

そのような中であって、種子島こりーなロビーにおいて、「日高蒨（ひだか しとみ）画伯絵画展」、「ふるさとの風景画作品展」を開催し、町民の絵画への関心を高める取組を行ったところです。舞台発表ができなかったため、各団体の皆様には大変申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし、これも新型コロナウイルス感染症予防対策で仕方のないことです。

全国民がこの新型コロナウイルスに翻弄され平穏な日常が奪われ、社会経済情勢も低迷している状況の下、一刻も早く安全なるワクチン接種が行われ、収束することを切に願うところです。

さて、私たち町民一人一人が文化事業に対する関心を高めるため、文化芸術に触れ楽しめる環境づくりを目指さなければなりません。

また、各地域において伝承されている郷土芸能に対する理解を深めると同時に、担い手育成をすることが大きな課題だと思います。今後も郷土芸能を保存継承する取組を前進していきたいです。

今までの伝統が途絶えることのないよう、町民が生まれ育ったふるさとの美しい自然・歴史そして伝統文化を見つめ直し、郷土愛護の意識変革の機会になればと考えます。そして、みなさんが元の平穏な日常生活ができ、各種行事も執り行われ、活気に満ちあふれた日々を取り戻せるまで踏ん張ってがんばりましょう。



絵画展・作品展の様子

最近の若っかしは！

中種子町子ども会育成連絡協議会
会長 住岡 重寛

自分たちがそれこそ若者だった頃、「最近の若っかしは」と、よく言われたものでした。マイナスなイメージしかありませんでした。

しかし、町子ども会育成連絡協議会会長とな

り高校生と接する機会も多くなったのですが、最近の高校生には驚かされます。「最近の若っかしはちごー(最近の若者は違う)。」

コロナ禍で、ほとんどの町の祭りや行事が中止になりました。3年生にとっては、最後の部活も不完全燃焼で終わってしまいました。

そんな中、高校生の有志がやってくれました。私たちが暮らす街を元気にしたい！励ましたい！という気持ちで始まった「旭町通りよろ〜て市」。この企画をやったのけたのです(よろ〜ては、種子島弁でみんなで集まっての意味)。しかも、準備期間を入れて半年で2回も。

第1回目は3年生が主体、第2回は3年生に刺激を受けた2年生が主体。商店街を歩行者天国にして、出店してもらう店には自分たちで交渉をし、中種子町地域おこし協力隊、通り会、青年部、観光協会と次々と大人を巻き込んでいきました。

自分たちが高校生の頃、こんなにパワーがあったらどうか？バイタリティがあったらどうか？主体的に動いたらどうか？大人を巻き込む力があったらどうか？地域をなんとかしたいと思う気持ちがあったらどうか？少なくとも私は何も持ち合わせていませんでした。

なぜ、今の若者はこんなに地域の事を考え、自分たちの問題として考えられるのでしょうか。

これから先は私見ではありますが、世間的に批判の多かったゆとり教育。私の子供がまさにゆとり世代と言われる若者です。この世代は、小学生の頃から総合的な学習の時間で自分たちの暮らす地域の事や広く社会の事を学び、自分たちで考え意見を出し合って学んでいます。ここに、ヒントがあるのではないのでしょうか。小さい頃から、地元を目を向ける！自分たちで意見を出し合って考える！

そうやって学んできた若っかしは、自分の土台をしっかりとち、島を出ても活躍をし、島に帰ってきてからも地域のリーダーとなり活躍してくれるのではないのでしょうか。



旭町通りよろ〜て市